

## ごきげんよう

朝のTVドラマの登場人物たちが交わす挨拶、「ごきげんよう」という言葉を聞いて、私が教育実習をさせていただいた東洋英和女学院を思い出しました。そちらの学校ではそのように挨拶されていましたが、今もお変わりないでしょうか。教育実習で私は英語を教えましたけれども、「ごきげんよう」とは挨拶せず、“Good morning, everyone! How are you?” と英語で呼びかけたものでした。それでも私の心臓はドキドキし、うまく教えられるか、不安で一杯だったことを覚えています。

挨拶と言えば、母が亡くなって 10 年になりますが、今でも母と、いつも電話で交わした挨拶と、別れる時の見送りを忘れることができません。「もしも、お母さん。悦子です。元気？」「元気よ」と、ごく普通の挨拶でしたが、母は毎回必ず「元気よ」と返事をしてくれたものでした。話ができるくらい元気だということなのでしょう。もともと余り丈夫でなかった母は、高齢になり、持病を抱えていましたが、コントロールしながら、何とか生活できていて、一病息災ということでしょう、元気なのが嬉しかったのだと思います。また、「じゃあね、さようなら」と言って帰るとき、母は玄関から出て来て、門の所に立って、私が角を曲がるまで手を振りながら見送ってくれるのです。母は「今が最後になっても悔いがないように」と思って、そのように別れの挨拶をしてくれました。父が毎日出かけるときもそうしていましたから、それは徹底したものでした。



母の少女時代

先日、「弘前藩の武士の作法と技」という弘前市教育委員会文化財課が主催したイベントの YouTube (<https://www.youtube.com/watch?v=IToEcxCW2ns&feature=youtu.be>) を見るチャンスがありました。父方の曾祖父は弘前藩の下級武士でしたので、ちょっと興味を持って見てみました。曾祖父は小野派一刀流と聞いていましたが、竹刀タコがあるほど剣道に熱心だったこと、また、いつも囲碁ばかりしていたということですが、もともと貧乏だったのに、明治になって零落の一途をたどるしかないほど、生活能力がなかった人でもあったようです。いったい何をしていたのでしょか。



修武館・古写真集より

さて、このイベントでは、弘前の武家屋敷で、試し切り、武士の作法、刀の持ち方の意味合い、剣術、棒術などを丁寧に実技を伴いながら説明、解説していました。江戸時代になれば、鉄砲が主流ですし、剣での戦いなど、無謀としか思えない武術です。けれども剣術の立会を見ると、瞬発力で相手を倒すのだと感じいました。その YouTube で「ごきげんよう」という言葉を聞き、驚きました。それは武士が他家の門で、「たのもう」と言って入るところから始まりました。無事に迎え入れられたあと、玄関でさらに「たの

もう」と声をかけ、家人が現れると、客人は「ごきんぎょう」と挨拶するのです。津軽弁なのか、少しなまっているようですが、解説では「ごきげんよう」という言葉で、明治初期まで、武士が用いていた独特な挨拶の言い回しであったということです。その言い方は、弘前藩だけのものであったか、あるいは全国的なものであったかは解説がありませんでした。「たのもう」が一般的ですから、「ごきげんよう」も全国ネットのものだったのではないのでしょうか。

となると、東洋英和女学院の挨拶は、明治初期までの武士の挨拶と言えなくもないと思ったしだいでは、みなさま、ごきげんよう。